

城 叫 絶

人 事 件 殺

有 栖 川 有 栖

有栖川有栖

新潮社



ぜつきようじようさつ じん し けん
絶叫城殺人事件

2001年10月20日発行

2001年11月5日2刷

【著者】 ありすがわありす 有栖川有栖

【発行者】 佐藤隆信

【発行所】 株式会社新潮社

郵便番号162-8711 東京都新宿区矢来町71

【電話】 編集部03-3266-5411 読者係03-3266-5111

【印刷所】 大日本印刷株式会社

【製本所】 加藤製本株式会社

© ALICE ARISUGAWA 2001, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-602652-X C0393

価格はカバーに表示してあります。

◆目次◆

黒鳥亭殺人事件	5
壺中庵殺人事件	47
月宮殿殺人事件	73
雪華樓殺人事件	109
紅雨莊殺人事件	153
絶叫城殺人事件	225

装帧 大路 浩 実
写真 菅 原 一 剛
フォーマットデザイン
新潮社装帧室

絕叫城殺人事件

黒鳥亭殺人事件

影絵になった烏が数羽。ねぐらへ帰っていくところだろう。

日はすでにとつぷりと暮れ、空のどの方角にも青みは残っていないかった。京都を出るのが遅くなりすぎたためだ。途中のドライブインで夕食をすませた後、食事はすませた、と天農に電話を入れてあるものの、ステアリングを握った私は、いささか気が急いでいる。助手席の友人はというと、ラジオから流れてくるショパンのノクターンに耳を傾けているのか、腕を組んで瞑目していた。心から寛いでいる姿にも見えるし、神経科医の椅子で不安な気持で治療を受けている姿のようでもある。いずれにしても、夜が風景を塗りつぶしていくただ中、海沿いの国道をひた走っているこの状況に、そのノクターンはBGMとして気恥ずかしいほどマッチしていた。演奏はハラシエビツチらしい。

日が沈んでから、私たちは理由もなく無口になっている。いや、友人の沈黙には、論文の想を練っているとか、次週の講義の内容を確認しているとかの理由があつて、頭が空っぽなのは私だけなのかもしれない。

人の心は真空になれないから、その空っぽの頭にも色んな想念のきれっぱしが横切る。そして、それらも無意味のままできていることに耐えかねて、これから訪ねようとしている天農と大学時代に

交わした雑談やら、彼の結婚の通知やら、娘の誕生を知らせる年賀状やら、早すぎる妻との死別を報せる悲しい文面やらに、次第に収斂しゅうれんしていくのだった。——昨日おとといの深夜に突然かかってきた電話も。

——火村ひむらときてくれないか。

ただごとではないのだ、と強調するのを聞くまでもなく、七年ぶりに耳にする彼の声には緊張感がにじんでいた。それだから、火村も私もすぐに駆けつけてやりたかったのだが、動かせない仕事があつて、訪問が翌々日となつてしまったのである。しかも、予定より五時間近く遅れている。

小さな漁港を抱きくるんだ町を通り過ぎた。国道は海と岐まがれて、丹後半島の奥へともぐり込んでいく。

「ドライブインから電話した時、どんな様子だった？」

目を開き、ヘッドライトで照らす路面をまっすぐ見つめた火村が話しかけてきた。そして、黒いシャツの首にだらしなく締めていた灰色のネクタイをほどこいて、ジャケットのポケットに丸めて押し込む。

「一昨日の電話と同じように、夜の海みたいに暗いトーンやった。後ろで女の子がたどたどしく絵本を読む可愛かわいい声がしてたんやけど、それとえらい対照的にな」

「女の子か。なんて名前だったっけな？」

「真樹まきちゃん。えーと、もう五つか」

同い年の友人の子供が、もうすぐ小学生という年齢なのだと思うと、老けたなと感じる。下宿

で馬鹿話に打ち興じ、でまかせ半分に野心と希望を語った日々は遠い。

「推理作家と犯罪社会学者と画家」と私は並べてみる。「青春の日に語った夢や。すごいな。三人とも曲がりなりにもそれに到達してるやないか」

私、有栖川有栖も。

傍らの火村英生も。

そして、天農仁も。

「あのな」火村は諭すように「青雲の志、ロマンチックな夢をかなえたのは君たちお二人だ。俺は、遠くをうっとり見つめながら、『いつか犯罪学者になってみせる』と誓ったわけじゃねえよ。研究を進めただけなんだからな」

「犯罪学者になって、悪と戦うのが少年時代からの夢やったんと違うのか？『ボクは、フィードワークとして警察の捜査に加わって、名探偵の役を演じるんだ！』」

「そんなガキがいるかよ」

犯罪学者はカメラを抜いてくわえる。狭い車内に煙を充満させて、私に意趣返しをしようとしているのだ。彼がライターを取り出すより早く、私は仕事を命じる。

「そんなもんを吸う前にちゃんと道を教えろ。このまま走ったら半島を一周して、城崎まで行ってしまうぞ」

火村は言われるまま道路地図帳を開き、火のついていない煙草をくわえたままナビゲーターを務める。なにに、もうすぐバス停がある。それを過ぎて間もなく右に分岐する道があるから、曲がれだ？ さっきバス停を通過したぞ、あれじゃなかったのか、と思った時、右に入る道が

見えた。私は慌ててステアリングをきる。

「城崎温泉に寄るのは帰りでいい。――黒鳥亭まではこれを一本道だ」

火村は地図をグローヴボックスにしまい、うまそうにカメラをくゆらせた。

＊

ドライブインやレストランを見なくなり、民家の明かりはぼつりぼつりと心細くなった。ただか標高三百メートルほどの峠を越えているだけなのに森は暗く、空気は寂寥さびれとして、地の果てにきたのではないか、という思いにとらわれる。ラジオのプログラムはジャズに変わり、サラ・ボーンが魂にしみるような声で歌っていたが、この峠越えのバックにはムソルグスキーの『禿山の一夜』あたりが似つかわしい。

「すごいところに住んでるんやな、あいつ。想像以上や」

一人で運転していたら、くだらない怪談を思い出して、背筋がぞくりとしているかもしれない。「大きなお屋敷を相続するのも考えものだな。こんな辺鄙へんぴなところに住んだら、本を買いに出るのもひと苦労だ」

火村は口笛でサラのメロディをなぞる。こんな地獄の底みたいところで口笛を吹くんじゃないよ、と臆病な私は思う。邪悪なものを呼び寄せそうではないか。

頂上を越えたらしく、うねうねと曲がりくねった道はなだらかに下りだす。木々の梢えだをすかし、彼方に小さな明かりがにじんでいるのが見えた。どうやら目的の地らしい。

「黒鳥亭か。ミステリで連続殺人事件が起きる館みたいな名前やな。そんな名前をつけるから……」

「現実に殺人事件が起きたんだ、か？　しかし、最初の殺人があつたのは天農が引越してくる前だ。その時は黒鳥亭なんて名前もついてなかっただろう」

しかし、主人が代替りした家で殺人劇が繰り返されるということこそ稀なはずだ。言葉には呪力があるのだから、やはり、黒鳥亭というどこか陰気で不吉な字面と響きが影響を及ぼしているのかもしれない。

黒鳥亭が建っている場所は国道から少し引込んでいて、ささやかな台地になっているらしく、そのおぼろげな全容のシルエツトが現われてきた。背景は漆のように黒い闇だが、どうやらそれは夜空ではなく海のようなのだ。黒鳥亭からは海が望めるのだな、と思つたとたんに、耳に届くはずもない潮騒の幻聴が聞こえた。

国道をそれて、砂利道の登り坂を三十メートルほど進んだところで、私は車を停めた。大阪の自宅を出、京都で火村を拾ってから三時間。ようやく黒鳥亭に着いたのだ。

それはアメリカ映画でよく登場するリトルタウンに多く建っているような下見板張りの二階家だった。壁だけ見ると、古い木造校舎の面影もある。お屋敷や館というのはやや大袈裟だが、大阪や京都の町中にあれば豪邸としか呼びようがないかもしれない。

何を気取って黒鳥亭などという名前をつけたのか、と訝つたものだが、その前に立って「黒」の字を用いた理由は判つた。外壁がすべて黒一色に塗られていたのだ。暗くてよく見えないが、屋根のスレートもまっ黒らしい。家が何かを恐れ、夜の帳にまぎれるために保護色を使っている

かのようにだ。

正面玄関に大小の人影があった。大きな方が手を上げて、救助を求める遭難者のように激しく振る。私たちは車を降りた。

久しぶりに見る天農は瘦せていた。頬が不健康そうにこけ、開いたシャツの胸許には鎖骨がくつきり浮かんでいる。腫れぼったい瞼は昔からだが、これほど落ちくぼんではいなかったはずだ。

「よお」

火村は右手を上げ、軽く言った。

「よくきてくれた」

天農の第一声だった。ルバシカのようなだつぷりとしたシャツの裾を、ぱつちりとした黒い瞳を見開いた巻き毛の女の子がしっかり握っている。訪問客に面食らっているようでもなく、はにかんでいるようでもない。ただ、子供らしい好奇心で、父親の友人というのがどんなものなのか観察しているのだろう。

「真樹だ。——真樹、ご挨拶は？」

少女は機械仕掛けめいた動きでべこりと頭を下げ、顔を上げ終わってから「こんにちは」とあどけない声で言った。

「こんにちは、真樹ちゃん」

火村と私はユニゾンで同時に挨拶を返す。スプーンを重ねたようにぴたりと一致していたのがおかしかったのか、少女は口許を押さえてうふふと笑った。可愛い。それにしても、自分は学生の頃から、女の子との会話においては、笑わせた回数より笑われた回数の方が多かったつけ、と

いじけたことを思う。

「火村さんと有栖川さんだ。有栖川って、『不思議の国のアリス』みたいだろ？ この人は、不思議なお話を書くのがお仕事なんだよ」

「アリス？ アリスは女の子だよ」

真樹は父親に抗議する。

「日本では、男の人にアリスという名前をつけることもあるんだ」

天農の答えは出鱈目でたらめがすぎる。そんな名づけ方は普通ではないし、アメリカにだってアリス・クーパーがいる。

「まあ、入れよ」と招き入れられた。

でかいだけのボロ屋だ、という主人の弁はあながち謙遜けんそんでもないことが、入ってみて知れた。

築後半世紀ほど経ているらしく、板張りの床は一步ごとに軋みきし、少しの風に窓がガタガタと鳴る。冬場は隙間風すきまかぜに悩まされそうだ。老朽化の進行を阻止する措置は、ずいぶん長い間とられていないようだった。内装も黒で統一されているのだろうか、と思ったのだが、壁紙は落ち着いた薄重うすずか色いろをしていた。ただ、広い家に父娘二人だけで暮らしているせいかがらんとしているのと、貧しげな調度のためか寒々しい。

海に向かった出窓に、大きな鳥籠とりかごが置いてあるのが目につく。籠の中に、黒い影がうずくまっていた。まさか、鳥か？

「九官鳥だ」天農が私の視線に気づいて教える。「叔母が飼っていたのを、そのまま引き取ってやった。おっと、起きたか」

バサリと羽音がして、首が持ち上がった。

「この家は外観から烏屋敷って呼ばれてたんだ。実際、ここいらには烏も多くてな。よく屋根にとまってる。その名前のせいでもないだろうに、ここで縁起のよくないことがあったんで、叔母が改めて黒烏亭と名づけたんだ。塗りかえて白烏亭に仕立てるには、ペンキ代が惜しかったんだろ。それで、烏のイメージを払拭^{ふつしよく}するために九官鳥を飼うようにしたんだとさ」

名前の由来は判った。

「こんばんは」

腹話術師の人形めいた声を作って私は呼びかけてみる。鳥は、こちらをまっすぐ見返したまま、うんともすんとも言わなかった。

「啼^なかないよ、アリスさん。一回も啼いたことないもん」

真樹は申し訳なさそうだ。

「昔からそうらしい」天農が言う。「真樹と俺がどれだけ熱心にしつければいいとしても、こんなにちは、も覚えない。よほどひねくれ者か、頭が悪いんだ」

私のマンシヨンの隣人は啼かないカナリアを飼っているが、こいつもその同類らしい。

「お父さん、キュウちゃんに頭が悪いなんて、かわいそうなこと言っちゃやだ」

真樹がふくれっ面をし、父親は「ごめんごめん」と謝った。火村は鳥籠の近くに寄って、キュウちゃんの後ろに回る。あいつ、九官鳥なんかを珍しがっているのか、と思っていると、突然、手を叩いて大きな音をさせ、私たちを驚かせた。

「何をしてんねん、子供みたいに」